

令和 2 年 6 月 10 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04102

研究課題名(和文) 歴史社会学の(再)基礎づけ：グローバル・ヒストリーのメタ分析

研究課題名(英文) (Re-)Constructing Historical Sociology: Meta-analysis of Global Histories

研究代表者

山下 範久 (Yamashita, Norihisa)

立命館大学・グローバル教養学部・教授

研究者番号：90333583

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：歴史社会学を歴史学研究のメタアナリシスとして基礎づけるという研究目的に対し、計画に基づいて研究を進めた。既存のメタアナリシスの手法は、計量化が進んだ領域では相対的に容易に応用が可能であるとの知見が得られる一方、歴史学における計量的手法の適用範囲は限定的であり、単純な移植による応用にも限界があることを確認した。

非計量的手法を中心とする歴史学においては、対象の概念化および空間的・時間的枠組みについての批判的検討が必要となることを明らかにした。特にこの点では、歴史学と他の社会科学との間で概念化の前提が大きく異なること、また歴史学の内部においても概念化の前提が多面的であることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、歴史社会学というディシプリンを、今日の歴史学および社会学の実証研究の水準に似合うかたちで、基礎づけなおすという点にその学術的意義がある。また歴史学の個別の研究成果の意義を横断的に再評価するパースペクティブを開くことで、歴史学と社会科学の諸ディシプリンの間の架橋にも道をひらくものであり、現代社会の諸課題を考えるうえで、適切に歴史を参照するという歴史学への社会的要請に応えるうえで、社会的な意義を有するものでもある。

研究成果の概要(英文)：The research was conducted with the aim of providing a disciplinary foundation for Historical Sociology as meta-analysis of historical studies. While the investigation confirmed that the methods of meta-analysis developed in the scientific fields can be applied to historical studies with elaborated quantitative approaches relatively easily, it turned out that direct importation of extant methods from scientific fields is largely very difficult given the limited range of quantitative approaches in the entire scope of historical studies. The fundamental finding is that a critical recontextualization of historical concepts and reconceptualization of historical time and space is necessary for historical studies based primarily on non-quantitative approaches. It is also analyzed that the gap(s) in the context(s) of historical concepts between history and other social scientific disciplines and within history.

研究分野：歴史社会学

キーワード：歴史社会学 メタアナリシス

1. 研究開始当初の背景

歴史社会学は、二十世紀中葉、一方で近代化論やマルクス主義をベースにしたグラント・セオリーの社会理論が隆盛しており、他方で歴史学研究の基礎となる史料の整備やアクセスがまだ十分でなかったところに、社会理論によって歴史学的記述の隙間を埋め、特に近代化に伴う構造的な社会変化について記述ないし説明を与える研究として一定の研究の蓄積を見た。

しかし特に冷戦の終焉以降、一方で経験的裏付けを欠くグラント・セオリーに対する信憑が急速に低下し、他方で史料環境が向上し、かつデータ処理の技術・技法が発達した結果、歴史学の経験的実証の水準は劇的に上がり、歴史社会学が「大きな物語」を提供する役割は縮小し、むしろ過去をフィールドとする社会的実証研究へと性格をシフトすることになった。このような意味での歴史社会学は、社会的ツールも含めたディシプリンのツールを貪欲に摂取する歴史学と区別があいまいになり、この意味で歴史社会学は学としての自立性の危機にある。

反面、実証の水準が上がったことで歴史研究が高度に細分化される傾向が加速し、かつて歴史社会学が提供してきたようなマクロな次元での社会の構造的変化に関する研究は、むしろ歴史研究から切り離される傾向が生じている。ここでは逆に「大きな物語」を提供する歴史社会学の再生が要請される状況がある。

応募者はこれまで、a) 世界システム論を起点として歴史社会学の立場から、急速に高度化・細分化が進む歴史研究の蓄積を、社会理論に回収するのではなく、個々の経験的実証を接続することで総合する研究に従事する一方、b) 歴史学的実証が他のディシプリンの前提となる歴史認識にどのようなかたちで摂取されるか(あるいは摂取されないか)についてのメタディシプリンの研究に従事してきた。

a) の系列では、のちにグローバル・ヒストリーの潮流へと流れ込んだ近世の非ヨーロッパ世界に関する歴史学の研究蓄積を総合し、近世帝国概念を構築して、世界システム論の歴史記述の更新を試みる研究を行ってきた。またそこから派生して世界システム論自体の史学史上の位置づけに関する研究も行ってきた。

b) の系列では、国際関係論における標準的な歴史記述であるウェストファリア史観について、いわゆるグローバル・ヒストリーの潮流を含む歴史学の研究蓄積が国際関係論の歴史認識において無効化されるメカニズムに関する批判的研究を行った。

本研究は、これら両系列の研究を学の(再)基礎づけの次元へ向けて体系化を図る意図で発案されたものである。

2. 研究の目的

本研究は、近年の社会科学の哲学的・方法的基礎づけに関する議論の進歩をふまえて、歴史学を基礎研究とする応用研究としての歴史社会学の(再)基礎づけを行うことを大目的に設定した。

この大目的に照らして、本研究は近年のグローバル・ヒストリーの研究蓄積を、歴史社会学的な応用可能性の観点から検証する研究に取り組む。具体的な応用可能性の前線として、メタアナリシス、メタヒストリー、社会科学の基礎としての歴史認識の三つのフィールドを置き、それぞれのフィールドにおいて歴史社会学の(再)基礎づけの規準を検討することが本研究の目的である。

3. 研究の方法

本研究の主軸は文献研究である。特に社会科学の歴史認識へのインパクトを検討する際には、各分野の専門家からのフィードインを得つつ、以下のスケジュールに沿って研究を遂行した。

平成 29 年度：メタアナリシスの水準における検討

平成 30 年度：メタヒストリーおよび社会科学の歴史認識の水準における検討

平成 31 年度：歴史社会学の再基礎づけの条件についての検討

より具体的には以下の通りである。

【平成 29 年度】

平成 29 年度は、メタアナリシスの水準における検討を上述の第一段階から第二段階まで進め、グローバル・ヒストリーの個別の研究を接続して得られる、よりマクロな歴史記述上のインプリケーションの導出を目指すことを目標とした。

具体的には、次のような作業を遂行した。

グローバル・ヒストリーの個別的研究の蓄積についてのサーヴェイ

これについては過去に応募者が参加したグローバル・ヒストリーに関する二つの科研費研究(「グローバルヒストリーの構築とアジア世界」(基盤研究 B:平成 17 年 4 月~平成 20 年 3 月および「帝国・システム・海域ネットワーク:19 世紀以前のアジアにおける広域地域史の再構築」(基盤研究 B:平成 21 年 4 月~平成 24 年 3 月)を通じて、すでに一定の蓄積があり、本研究ではその蓄積をベースにサーヴェイ内容の更新を行う。

本研究にいうメタアナリシスは、医薬系分野で一般に言われるような厳密に統計学的な操作そのもののことを指すものではない(そもそも個別の歴史研究はそのような操作に適したデ

ータをそれほど提供しない)。むしろそのような純粋な統計学的操作では統合できない定性的要素を多く含む個別の研究結果間の統合をどのように理論づけるかについて、社会科学における定性的研究と計量的研究の関係をめぐる最近の研究をふまえ、理論的検討を行った。

【平成 30 年度】

平成 30 年度は、a) グローバル・ヒストリーをひとつの言説として捉えて観察できる歴史記述の歴史的变化についての分析、b) 国際関係論や経済学、政治学など社会科学のディシプリンにグローバル・ヒストリーの研究蓄積がどのようなインパクトを与えているか(いないか)の知識社会学的分析を行う。

具体的には、次のような作業を遂行した。

書かれたものとしての歴史は、過去の透明なメディアではなく、それ自体が歴史的に構築された歴史学の再帰的对象である。この意味で、本研究にいうメタヒストリーは、歴史記述(historiography)の歴史を分析することを通じた個別の歴史研究の集積に対するメタ分析を指す。このため、もっぱら文体や様式を問題とする狭義のメタヒストリーだけではなく、物語論や言説分析を参照した方法的拡張のための理論的検討の作業を行った。

たとえば国際関係論にはウェストファリア史観があるように、近代的ディシプリンとしての社会科学には、それぞれに共鳴しあいながら異なるニュアンスの歴史観 しばしば西欧の近代化の経験を経験に純化する操作をともなう歴史観 が介在する。またそうであるがゆえに、個別の社会科学のディシプリンの内部において、その歴史観に対する批判や反省が断続的に行われる。本研究では、経済学や政治学などの学史研究においてそのような歴史観の批判がディシプリンに遺す痕跡を確認すると同時に、特にグローバル・ヒストリーとの関連で各ディシプリンの歴史認識の前提にどのようなインパクトがあるか、隣接分野の研究者との討議を通じて検討した。

上記 の理論的検討作業を踏まえ、グローバル・ヒストリーのメタヒストリーおよびグローバル・ヒストリーの他の社会科学ディシプリンの歴史認識へのインパクトの分析を試みた。

【平成 31 年度】

平成 31 年度は、前二年度の検討結果を統合し、歴史社会科学の(再)基礎づけの理論化の作業へとフィードバックして、歴史学を基礎研究とする応用的社会科学としての歴史社会学の定式化の条件の検討に進んだ。

4. 研究成果

歴史社会学を歴史学研究のメタアナリシスとして基礎づけるとい研究目的に対して、計画に基づいて研究を進めた。他分野において開発されてきたメタアナリシスの手法は、計量化が進んだ領域では、相対的に容易に応用が可能であるとの知見が得られる一方、歴史学における計量的手法の適用範囲は限定的であり、単純な移植による応用にも限界があることを確認した。

非計量的手法を中心とする歴史学の研究成果を横断的に再分析するにあたっては、対象の概念化、対象を同定する空間的・時間的枠組みについての批判的検討が必要となることを明らかにした。特にこの点では、歴史学と社会科学の諸ディシプリンとの間で概念化の前提が大きく異なること、また歴史学の内部においても異なる学問的伝統の間で共約可能性の低い概念化が十分な批判的検討のないまま流通していることが、大きな課題として切り出された。この中間的な成果は拙編『教養としての世界史の学び方』において公表されている。

計画の最終年度にあたる 2019 年度は、この批判的検討の理論的焦点として、歴史学における内部観測の問題を主題化し、歴史を書く主体と書かれる客体の分割をめぐる問題にとりくんだ。具体的には、(1)パブリック・ヒストリーと、(2)人新世概念という二つのテーマを中心に研究会などを通して検討を進めた。両テーマともに研究会での報告内容をまとめたブックレットなどで成果が公表されるほか、特に(2)については関連図書の翻訳および成果にもとづく著作の刊行が予定されている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 原田憲一、小倉紀蔵、山下範久	4. 巻 33
2. 論文標題 変容する知の制度：学会、大学、ディシプリン	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 比較文明	6. 最初と最後の頁 2-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下範久	4. 巻 41
2. 論文標題 汪暉『世界史のなかの世界』書評	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 社会思想史研究	6. 最初と最後の頁 257-260
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 2件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山下範久
2. 発表標題 一元論と二元論のあいだ：世界システム論からみた人新世論
3. 学会等名 比較文明学会関西支部研究例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山下範久
2. 発表標題 「ポスト・ヒューマン時代の所有権概念に関する学際的研究」のためのプロポーザル
3. 学会等名 「ポスト・ヒューマン時代の所有権概念に関する学際的研究」研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山下範久
2. 発表標題 「史観」批判は出会えるか？
3. 学会等名 HMCオープンセミナー特別回（社会科学と人文学の対話：『国書がむすぶ外交』「総論」を素材に）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Norihisa Yamashita
2. 発表標題 Evaporation of history?: History Communication in the Age of the Post-truth and the Post-human
3. 学会等名 Asia and Japan: Perspectives of History, An International Symposium Organized by Asia-Japan Research Institute Ritsumeikan University（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 山下範久	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東洋経済新報社	5. 総ページ数 456
3. 書名 教養としての世界史の学び方	

1. 著者名 赤江雄一、島村菜津、山下範久、勝川俊雄、生源寺眞一、池上俊一、比嘉理麻、山本道子、大道寺慶子、勝川史憲、野口和行、小泉武夫	4. 発行年 2017年
2. 出版社 慶応大学出版会	5. 総ページ数 312
3. 書名 生命の教養学12 食べる	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----